

**318** 悪性褐色細胞腫に対する<sup>131</sup>I-MIBG治療の適応  
有竹澄江(横浜労災 放)、日下部きよ子、金谷信一、  
金谷和子、太田淑子、牧正子、重田帝子(東女医大 放)

悪性褐色細胞腫に対する有効な<sup>131</sup>I-MIBG治療がなされるためには適応を検討する必要がある。治療効果に影響する因子として、<sup>131</sup>I-MIBGの投与量、腫瘍吸収線量(RI摂取率、有効半減期、腫瘍重量)、腫瘍発育速度、<sup>131</sup>I-MIBGの体内分布および腫瘍内分布が挙げられる。

1984年1月より1992年3月までに悪性褐色細胞腫の診断で<sup>131</sup>I-MIBGシンチグラフィを施行した13名について検討した。このうち5名に高度集積を認め<sup>131</sup>I-MIBG治療を施行した。5名の腫瘍吸収線量をSPECTを用いて求めたが、1回の治療では高い吸収線量は5名とも得られなかった。1名は3回の<sup>131</sup>I-MIBG治療で腫瘍の発育が抑制されているが、他の4名では腫瘍の発育抑制効果は認められていない。<sup>131</sup>I-MIBG治療の決定には慎重な検討が必要と考えられた。

**319** 副腎皮質シンチの副腎部偶然腫での役割  
中條政敏、中別府良昭、岩下慎二、米倉隆治(鹿大 放)

副腎皮質シンチの副腎部偶然腫における役割を明らかにする目的で、一側性副腎部偶然腫39例のシンチ所見をCT所見と対比し検討した。内訳は良性副腎腫瘍27例、悪性副腎腫瘍6例、副腎近傍腫瘍6例である。良性副腎腫瘍は12例がhot nodule、1例がwarm nodule、3例が正常像、4例が全体的集積低下像、3例が部分欠損像、4例が完全欠損像を呈した。悪性副腎腫瘍は1例が不均一撮取像、2例が部分欠損像、3例が完全欠損像を呈し、うち2例のホルチゾール産生副腎皮質腫瘍では対側副腎は描出されなかった。副腎近傍腫瘍は4例で正常像、2例で位置異常像を呈した。副腎皮質シンチは副腎偶然腫の中からhot noduleを呈する無症候性腺腫と特徴的所見を示すホルチゾール産生癌の検出に、また副腎内外腫瘍の鑑別に有用と考えられた。

**320** 肺癌副腎転移巣への骨シンチ異常集積の検討  
竹田芳弘、巻幡栄一、佐藤修平、奥野恵子、山本道法、  
中川富夫、河野良寛、柴 勝美、清水光春、新屋晴孝、  
平木祥夫(岡山大 放) 永谷伊佐雄(同 中放)

骨シンチグラフィにおける肺癌副腎転移巣への異常集積の頻度、集積機序について検討した。1982年4月から1991年7月までの間当院を受診したstage IVの肺癌157症例のうち、剖検またはCT、超音波によって副腎転移を認めた12症例を対象とし、<sup>99m</sup>Tc-HMDP骨シンチグラフィでの副腎転移巣への集積の有無、転移巣の大きさ、石灰化・壊死巣の有無、vascularityなどについて検討した。12症例中2例に異常集積を認め、原発巣の組織型は腺癌と大細胞癌であった。集積機序としては転移巣の大きさ、壊死などが考えられたが、その他、病理学的石灰化の有無、発育速度などの複数の要素が関与しているものと思われる。

**321** 骨シンチグラム上flare responseを呈した  
と思われた前立腺癌の1例

相澤 卓、栃本真人、伊藤貴章、辻野 進、秋山昭人、  
並木一典、三木 誠(東医大 泌)

当院で過去5年間に骨シンチグラフィで経過観察された前立腺癌患者77例中1例にflare responseと思われる骨シンチグラムを認めたので報告する。症例は51歳男性。腰痛の為、近医で加療するも改善せず、本院受診。精査の結果、前立腺癌の骨転移と診断した。前立腺生検で中分化型腺癌、腹部CTにて後腹膜リンパ節腫大を認めた。骨シンチグラムにて多数の異常集積あり。初診時のPAP=320ng/ml、 $r$ -SM=15ng/mlと高値を示していた。抗男性ホルモン療法開始し、約1カ月後の腹部CTではリンパ節は著明に縮小、臨床症状も改善し、PAP、 $r$ -SMもほぼ正常域となった。同時期の骨シンチグラムでは治療効果に反して集積の上昇を示し、flare responseと考えられた。

**322** 各種PSA測定キットの特性に関する検討  
秋山昭人、栃本真人、伊藤貴章、辻野 進、相澤 卓、  
並木一典、三木 誠(東京医大 泌)

PSA(prostate specific antigen:前立腺特異抗原)は、前立腺癌の腫瘍マーカーとして各種治療後の再発、再燃の検出などにおいてその有用性が示されており、現在広く臨床に用いられている。しかしその反面、市販されているキットが8種あり、各々のキット間でその測定値が大きく異なるなどの問題点も指摘されている。前回(第31回)の総会において我々はボールエルザPSAキットの基礎的・臨床的検討を報告したが、他キットとの比較において測定値の違いのほかに、測定原理などによる各キットの性格の違いが明かとなってきた。各キットの標準血清や希釈液の検討のほか、同一条件下における検出感度や特異度、また、測定手技の違いなどの面から、それぞれのキットの特性につき検討し報告する。